

第四節 「モンゴロイド」「コーカソイド」「ネグロイド」

「モンゴロイド」や「コーカソイド」などの名称は、日本の高校の教科書や事典でもひろく使用されており、社会に定着している。しかし「コーカソイド」の語源が旧約聖書の「ノアの箱舟」に由来し、他方「モンゴロイド」が偏見の意味あいをもつことは、日本ではほとんど知られていない。

ブレイスは、一九八九年の国際学会において日本人研究者グループが「モンゴロイド」などの用語を用いたことに言及しているが (Brace 1995)、その一人が斎藤成也であり、その際ブレイスから受けたコメントは、斎藤がのちに独自の用語を提唱するきっかけをつくった (本書斎藤論文参照)。しかしその後現在にいたるまで、日本においては「モンゴロイド」が第一線の自然人類学者のあいだで積極的に使われ、シリーズ本やドキュメンタリー・テレビのタイトルなどにも冠されている。知の権威としての教科書や事典類による社会への浸透と、専門家による種キャッチ・フリーズ的な使用により、「モンゴロイド」は明らかに一種の循環関係を築きながら日本社会のなかで再生産されつづけている。

ここで、「コーカソイド」「モンゴロイド」などの名称と西欧的背景との関連性をみるために、近代科学における人種分類に投影される世界観を、名称との関係に限定して吟味しておくこととしよう。⁽⁸³⁾ 異なる時代と社会的脈絡を生き、た彼らの偏見を現代の視点から糾弾することが目的ではない。現代に生きるわれわれが、これらの用語に含まれる意味を理解することが重要であると考えるからである。

近代科学における人種分類

近代的意味あいの人種分類に先鞭をつけたのは、フランスの医師F・ベルニエであった。ベルニエは一六八四年、「国や地域によってのみ世界を分類してきた」それ以前の地理学的手法ではなく、自身の旅行体験から、顔立ちや体型にもとづく分類方法がより有効であると考え、四つないし五つの「種ないし人種」(species races)への分類を提唱した⁽⁵⁴⁾ (Bernier 1684 [1684]: 360-362; 2001 [1684]: 148-150)。旅行体験を通じて獲得された世界観をもとに人間の外見的特徴を指標とするこの方法は、大航海時代のひとつの産物といえる。

近代科学の父祖の一人として知られるリンネは、『自然の体系』で動物界におけるヒトを変異 (varieties) として分類することを試みているが、彼の分類や特色記述からも当時の世界観がうかがえる。初版(一七三五年)では、人類を四つの種に分類し、それぞれを以下のように特色づけている⁽⁵⁵⁾。いわく、白色ヨーロッパ人は、皮膚色が白く、活気に溢れ、創造力に富み、赤色アメリカ人(アメリカ・インディアン)は、赤っぽく、粘り強く、暗色アジア人は、皮膚が黄色で、鬱な気質で、柔軟性に欠け、黒色アフリカ人は、黒色で、ずるく、怠惰で、無頓着な気質であると⁽⁵⁶⁾ (Linnaeus 2001 [1760]: 153-168; Schacht 1950 [1924-25]: 357; 西村 一九九九:二八)。リンネの分類をめぐっては次の点に注目しておきたい。第一に、四体液(多血質、胆汁質、粘液質、黒胆汁質)の配合具合によって気質と体質が決定されると信じられていた当時の生理学の伝統を踏襲していること、第二に、この世のすべての存在がヒエラルキーをなして鎖のようにつながっているという伝統的世界観、すなわち「存在の大きいなる連鎖 (Great Chain of Being)」に言及していること、そして第三に、この時代の他の人種分類と同様、分類上、皮膚の色が重要な位置を占めていること、である。一八世紀博物学のもう一人の代表的存在は、C・ビュフォンである。『博物誌』(一七四九―一七八年)において、人類を以下の六変異に分類している。ラップ||極北人、タルタル人、南アジア人、ヨーロッパ人、エチオピア人、アメリカ人である。ここでのタルタル人 (Uss Tartares) とは、モンゴル人、ヨーロッパ人、エチオピア人、アメリカ人、ヨーロッパでも日本でもタルタル(韃靼)の名がひろく知られていた。ビュフォンは、人類は元来ヨーロッパ人を原

型とするひとつの種であったと述べているが、それは「エデンの東」がパリ付近であると考えたからであった。そしてパリから離れ、他地域に移動するにもなつて、気候や食物、生活習慣、疫病などにより人類の原型から退化し、それが次世代に継承されることにより、変異が生じると論じている (Buffon 2001 [1749]: 371-372; Gossett 1963: 36; 鳥居 一九七六 [一九三〇]: 二〇)。

しかし「コーカソイド」「モンゴロイド」の基となる語を生み出し、人種分類に世界的影響を及ぼした人物は、頭蓋学の祖と呼ばれる前述のブルーメンバッハである。収集した頭蓋骨を基に人種分類論を提示したブルーメンバッハは、それ以前の哲学的な推論を実証的研究へと発展させた。「人類の自然の変異について」(初版一七七五年、第三版一七九五年)で「コーカシア (Caucasiae)」「モンゴリア (Mongolicae)」「エチオピア (Aethiopiae)」「アメリカナ (Americanae)」「マレー (Malaciae)」「マレーは第二版で追加」という五変異 (varietatis) への分類を提唱し⁽⁵⁵⁾、それぞれの皮膚の色を「白色」「黄色」「黒色」「銅色」「黄褐色」と特色づけている (Blumenbach 1865; 2001 [1795])。これが今日の教科書における「白色人種」「黄色人種」などの表記にみられるように、人種を「色」で分類する認識の基本となったのである。

ただし、啓蒙主義に感化されたブルーメンバッハが人種ではなく「変異」であると強調し、人類に明瞭な境界を引くことなどできないと訴えていたことは、当時の文脈に照らせば、注目に価する⁽⁵⁶⁾。そしてブルーメンバッハが用語の命名者ではあったとしても、それを今日的な人種の理解へと歪曲したのは、前述のモートンのような後の科学者であることを忘れてはならない。

「コーカソイド」「モンゴロイド」「ネグロイド」のはらむ問題

しかし、今日を生きるわれわれが「コーカソイド」「モンゴロイド」などの用語を継承する場合、ふたつの意味において注意が必要である。ひとつはコーカソイドの用語がもつ、ユダヤキリスト教的 세계観との関連である。当時、ヨーロッパの研究者の多くは、コーカサス山脈に多大な関心を寄せており、ブルーメンバッハも例外ではなかった。コーカサス山脈の南側(現在のトルコ領の最東端)に標高五二二三メートルのアララト山があり、その山こそ旧約聖書

で、ノアの洪水の後、「箱舟はアララト山の上に止まった」(創世記八―四)と記されている聖なる地なのである。⁽⁶³⁾ 当時、アララト山のあるコーカサスは、人類(白人)発生の地であると考えられていた。ブルーメンバッハが、ヨーロッパの中心から離れたコーカサス山脈で見つかった頭蓋骨をもとにヨーロッパ人をコーカシアと命名したゆえんである(Gossett 1963: 38; Barkan 1992: 125)。もうひとつは、ブルーメンバッハにとって、コーカシア人はすべての基本形であったことである。彼はモンゴリア人とエチオピア人をコーカシア人から相異なる二方向に分岐したそれぞれの極に、さらにコーカシア人とモンゴリア人の中間にアメリカ人、コーカシア人とエチオピア人の中間にマレー人を位置づけていた。またコーカシア人があらゆる人類のなかで、「もつとも美しい頭型」をしており「最良である」と形容したことはよく知られている(Blumenbach 1865 [1775]: 34-36)。

つぎに、日本に住むわれわれにもつとも馴染みの深い「モンゴロイド」について考えてみたい。モンゴル人というアジアのひとつの集団の名称が、アジア全体の人々を指示する語として使用されることに違和感を抱くのは、現代のわれわれだけではない。日本民族学の創始者の一人である鳥居龍蔵は、「蒙古人種の名称とブルーメンバッハ」と題した小論のなかで、ブルーメンバッハの五分類を紹介しつつも、「蒙古人」の名が使用されていることを「奇妙な感じ」と述べ、「けれども今日は誰でも彼でも、アジアの住民を蒙古人種といつても、誰一人として不思議を感ずる者はない。かえってこの言葉は便利な、しかも普通の名称となつてしまったのである」と洩らしている(鳥居 一九七六「一九三〇」: 一九)。またアジア言語の研究者として一九世紀初めに活躍したJ・クラブロト(Klaproth)も、一八二五年に「Mongol」はタタル人(ナシオン・タタル)の一族(トライブ)にすぎないのである」と述べ、この語の使用に異を唱えていたという(鳥居 一九七六「一九三〇」: 二〇―二一より引用)。

ブルーメンバッハがアジアの人々を「モンゴリア」と命名したのは、当時のヨーロッパにおいて、ジンギス・カンやその孫クビライ・カンの時代のモンゴルの軍事力がひろく認知されていたからであろうといわれる(Buxton 1925: 56-57)。しかし、単なるモンゴルの名称以上の意味あいもあった。マルコ・ポーロが中国を訪れたのは、中国がこのクビライ・カンの支配下にあった時である。マルコ・ポーロの『東方見聞録』や、出版当初から一八世紀にかけてア

ジアに関してのもっともひろく読まれたというJ・マンデヴィル『東方旅行記』(一三五六年)には、アジアの女性に対する性的好奇心や、男性に対するひとつ目・無頭の獣、怪物などの表象に映される偏見と優越意識が、随所に見受けられる(マンデヴィル一九六四; Okihito 1994: 14-15)。

さらに形態学的観点からいっても、モンゴル人が東アジア人から距離的に遠いことは、すでにブレイスが指摘しており(Brace 1996)、『最近のI-LD (Interlandmark Distances) や頭骨測定の研究にもとづいた研究でも、モンゴル人は、アラスカのアリユート人には比較的近いが、東アジア人とはかなり離れていることが報告されている(Ostley et al. 2003)。ただしこの点は、見方が分かれるようで、たとえば溝口は、諸地域集団の永久歯菌冠の計測値にもとづき、モンゴル人が西日本の弥生時代人・古墳時代人、東日本の古墳人にきわめて近い距離にあると異なる見解を報告している(溝口二〇〇三)。もっともそれによれば、モンゴル人と古墳・弥生時代人、現代日本人は、世界中の集団を四つに分けたクラスターのひとつに入るが、下位レベルでは、モンゴル人と古墳・弥生時代人は、現在の日本人よりも、ニューブリテン島人やオーストラリア先住民に近い。一方斎藤の遺伝学的分析によると、現代モンゴル人は、韓国人、日本人、アイヌ人などの遺伝的距離が小さいという(斎藤一九九五)。方法論の差によってもたらされた結論の違いであろうが、いずれにせよモンゴルに由来する「モンゴロイド」が東アジア人を表象する言葉として用いられているのである。

「モンゴロイド」という用語は、他の問題もはらんでいる。というのも、それが二一番染色体の異常によって生じるダウン症を指す言葉として長く用いられていたからである。ダウン症の子どもにみられる眼窩間の骨発達、黄色を帯びた皮膚の色、知的障害が、ヨーロッパ人が抱く東アジアの人々のステレオタイプと一致して、その症状を指す言葉となった(Brace 2000: 291)。その後、露骨な差別的表現が批判を浴び、この症状の最初の研究者(John Langdon Down)の名をとって現在の「ダウン症(Down syndrome)」という名称が用いられるようになった。ダウン症に対する誤った認識は論外であるが、「蒙古鬘ちこむかた」とも呼ばれる上まぶたから目頭に広がる皮膚の鬘を、知的障害の徴候として表記する本さえ存在していたのである(クルークシャンク『われわれのなかのモンゴル人』一九二四年)。

「コーカソイド」「モンゴロイド」はブルーメンバッハの命名によるが、では「ネグロイド」はどうか。ブルーメンバッハは、アフリカ人の指示語として当時流通していた「エチオピア」を用いている。「ネグロイド」は、ラテン語 *negre* から派生した言葉で、字義通りには「黒」を意味する。しかし濃い皮膚の色をつくるメラニン色素は、紫外線を妨げる働きをもち、アフリカ人のみならず、南アジア人やオーストラリアのアボリジニ、フィジー人などの皮膚にも多く含まれている。しかしこれらはそれぞれ集団遺伝学的には距離がある。たとえばフィジー人は、アフリカ人よりも東アジア人に近い。文字通りの「ネグロイド」のように皮膚の色の濃さで一括りにできるような集団ではないのである (Brace 2000: 288)。

以上みてきたように、「モンゴロイド」「コーカソイド」「ネグロイド」などの用語には、皮膚の色を他者との弁別基準として重視し、ヨーロッパ人の頭蓋骨を基本形とみなす西欧中心的な価値観が色濃く反映されている。今日では一部の人種実体説をとる形質人類学者などを除いて、「モンゴロイド」「コーカソイド」などは国際的にはほとんど使われなくなっている。「モンゴロイド」を積極的に使用する日本人研究者も、人種の生物学的実体を肯定する立場から、科学的に最初に定着した言葉を便宜的に使うという片山のような立場 (本書片山論文) まで、人種に対する考え方は必ずしも一様ではない。また多賀谷論文のように、日本人研究者が人種主義的傾向をもっていない証拠だと捉える見方もある。しかしながら、日本人自らが、西欧中心的世界観を生い立ちにもち、しかも人種概念を生物学的に実体視するニュアンスと偏見の意味あいをもつこれらの語を積極的に使用しつづけている現状は、国際的スタンダードからかけ離れていると言わざるをえない。

第五節 DNAからみる「アジア人」「ヨーロッパ人」「アフリカ人」

二〇〇三年四月にヒトゲノム配列の解読が終了したことは記憶に新しい。ゲノムとは、アデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、チミン(T)という四種類の塩基が鎖状につながったDNAの一セットを指し、ヒトゲノムとは、三〇億塩基対からなるヒトDNAのすべての塩基配列を指す。一番から二二番までの二二本の常染色体と一本の性染色体(ただしこれはXとYの双方を調べる)に遺伝情報を担うDNAが含まれている。この解読終了に先立つ二〇〇〇年六月にゲノム概要解読終了が宣言された(詳細は『ネイチャー』二〇〇一年二月二十五日号および『サイエンス』二月一六日号に公表)。そしてその後のヒトの多様性に関する遺伝学的研究の躍進には目をみはるものがある。SNP(スニップ、一塩基多型 single nucleotide polymorphism の略、遺伝子の一塩基が入れ替わったもの)などの新たな遺伝子解明手法の導入により、具体的な塩基配列の比較が部分的ながら可能になりつつある。しかしながら、これは学問界だけの変化ではない。アメリカでは、DNA鑑定から個人の祖先の「ヨーロッパ人」「アフリカ人」などの出自比率を割りだしたり、出生前診断・着床前診断をおこなうビジネスまで現れている。また特定の病気が特定のマイノリティに高い罹病率で観察されることから、環境や社会的要素が看過され、誤解を招きかねない解釈が施されつつあるのも現状である。

日本では、生物学的人種が破綻したことを積極的に提唱している研究者は例外で (e.g. 尾本 一九九七: Omoto 1997)、多賀谷論文が主張するように厳密な境界線が存在せずとも生物学の実体まで否定できないとする見解がひろく支持

されている。国際的には、人種が生物学的に有効な概念ではないとする見解が通説であることに変わりはない。しかしこの数年の間にヒトゲノム解読や集団病理学などの進展によって、一部の研究者によって人種実体論ともいえる説が劣勢を巻き返しており、問題はいつそう複雑化している。混乱を避けるためにも、「進化した」ヒトの多様性に関する理解が求められているのである。

自然科学の学術雑誌から“race”という語がほぼ消失したとしても、「アジア人」「ヨーロッパ人」「アフリカ人」といった地理的大集団名（以下「大集団名」）でその差異が語られる局面は、『ネイチャー』『サイエンス』など自然科学の世界最高峰とされる雑誌でも頻繁に見うけられる。しかし最近これら的大集団名による用語が分析概念として有効であるか否かが問われつつある。以下、自然人類学やその隣接領域におけるヒトの多様性の研究動向から、自然科学の人種概念、あるいは最近人種に代わって頻繁に用いられるこれらの用語とその科学的実体性について、現在論点とされるもののいくつかを追って検討してみたい。

ここで断っておかなければならないことがある。私自身は、遺伝学の論文で鍵となる専門的な分析方法やアルゴリズム、分析結果の導き方の是非について主体的に判断する能力をまったく有さない。それについては、他のさまざまな論文による評価に依存せざるをえない。しかしあえてこのセクションを設けるのは、多くの自然科学者のあいだでア priori に捉えられている集団や人間の分類について、人種概念の歴史や人種差別を多少とも考えてきた人文科学の立場から課題として提示できることが、皆無ではあるまいと考えるからである。

ヒトの多様性をめぐる生物学的理解の転換点

最近の集団遺伝学などにおけるヒトの多様性をめぐる議論に入る前に、過去半世紀の、生物学的概念としての人種やヒトの多様性の理解をめぐりいくつかの重要な転換点について、まず導入的に概括しておきたい（竹沢二〇〇三a）。

一八世紀の博物学においても、その後の人種学においても、皮膚の色や頭蓋骨といった可視的な身体形質を弁別基準として人間を分類していた。一九世紀後半に発達した身体計測により、人種間の差異と優劣は科学的根拠をもつも

のとして議論された。いわゆる科学的人種主義である。しかし一九〇〇年のG・メンデルの遺伝法則の再発見によって遺伝学が始まり、人類集団の進化の歴史はやがて大きく塗り替えられることとなった。社会進化論や優生学がグローバル・レベルでまだ支配的であった二〇世紀前半、数人の人類学者らにより人種概念の恣意性がすでに指摘されていた。その代表的存在は、F・ボアズとその弟子A・モンタギューである。とりわけモンタギューは「人類の最も危険なる神話」(Montagu 1942a)において、固定的で類型的な人種概念に反して、ヒトは突然変異や自然選択の作用により変化しつづけるものであると、学会で嘲笑されながらもひとり訴えつづけた。

しかし何といつても幅広い層にインパクトを与えたのは、ユネスコ声明「人種問題についての専門家によるユネスコ声明——社会科学者による「見解」」(UNESCO 1950)および「人種と人種差の本質についての声明——自然人類学者と遺伝学者による「見解」」(UNESCO 1951)であった。とくにモンタギューが主たる起草者となった一九五〇年の声明は、すべての人種の知能は同程度である、混血による退化の議論には生物学的根拠は存在しない、国籍や宗教にもとづく集団と人種とは無関係であることなどを謳ったものであった。なかでも人種は「生物学的現象というよりむしろ社会的神話である」(強調引用者)という結びは、大きな反響を呼んだ(一部の自然科学者らの反発も受けることとなった)。このユネスコ声明は、第二次世界大戦時のユダヤ人に対するホロコーストという究極の人種主義を顧みて、世界に向けられたメッセージだったのである。

一九五〇年代末から一九六〇年代にかけて、マイノリティに関する意識革命がアメリカから世界に波及し、技術面でも遺伝子解析が発展した。そのなかで登場したF・リヴィングストンの研究は、それ以前の人種の理解を大きく転換させるものであった。それまで「黒人の人種の遺伝病」とされていた鎌状赤血球貧血が、アフリカに限らず、南ヨーロッパや西アジアなどの地域にも分布し、それが熱帯性マラリアと関連する実態を明らかにした。それによって人種ではなく、クライン(勾配的分布)という概念の有効性とヒトの変異の連続性を実証してみせたのである

(Livingstone 1958; 1962)。

その後二〇世紀の幕開けとともに始まった遺伝学は、一九五三年のJ・ワトソンとF・クリックによる二重らせん

構造の発見後、わずか五〇年にしてヒトゲノム解説を達成することとなった。この三〇年間に、集団内の多様性が集団間の多様性よりはるかに大きいことを示す研究成果が、数多く発表されている。対象や方法論は異なっても結果はほぼ一致しており、これらの研究は人種概念に生物学的根拠が存在しないことを裏づけるものとなっている。その皮切りとなったのはR・レウオンティンによる研究で、アフリカ人、ヨーロッパ人、アジア人などの大集団間による差異は、人類のすべての多様性のうちの六・三パーセントを占めるにすぎず、同一大集団内の集団間差異（たとえばアジア人の「日本人」と「中国人」など）が八・三パーセント、残りの八五・四パーセントは同一集団内の（たとえば「日本人」同士での）差異であるという、衝撃的な報告をしたのである（Lewontin 1972）。

現代人の起源と「人種」

現代人ホモ・サピエンスの起源をめぐり、長年「アフリカ単一起源説」対「多地域並行進化説」の激しい論争がつづいたが、今日遺伝学者・自然人類学者の見解はアフリカ単一起源説（出アフリカ説）ではほぼ一致している。アフリカ単一起源説とは、アフリカにおいて誕生したホモ・エレクトスが現代人ホモ・サピエンスに進化し、そのホモ・サピエンスが一〇万年から一五万年前に世界に拡散したと考える。それに対して多地域並行進化説は、ホモ・サピエンスでなくホモ・エレクトスが六〇万年から一〇〇万年前にアフリカから拡散し、諸地域においてそれぞれ並行してホモ・サピエンスに進化したと主張するものである⁶¹。

アフリカ単一起源説が圧倒的に有力となった最大の契機は、一九八〇年代末から一九九〇年代初頭にかけてミトコンドリアDNAハプロタイプの系統樹が発表されたことであった⁶²（e.g. Cann et al. 1987; Vigilant et al. 1991）。その後一九九〇年代後半から核DNAの研究が進み、その結果、女性のみをとおして伝えられるミトコンドリアDNAのハプロタイプだけでなく、男性のみをとおして伝えられるY染色体DNAのハプロタイプの系統樹についても重要な研究成果が発表され、単一起源説が支持された（e.g. Hammer et al. 1998）。さらに現代人のアフリカから諸地域への拡散の時期が、それまで考えられていたよりも歴史的にはるかに浅いことが明らかになり、人種に該当するような遺伝学的に